

アムールの風

（正統右翼の論理）

第17回
田中健之
（黒龍會会長）

第三章

歴史的再考察から見える歪んだ世界秩序

―変化し続ける中国共産党と―

中国民主化運動―

中国共産党は創立百年の間で、絶えず変化をし続けています。

毛沢東から鄧小平までの中国共産党の指導者は、革命第一世代、即ち自らが、中国共産党の創立に関わり、長征から延安時代、さらに抗日戦争から国共内戦を指揮して、夥しい人々の犠牲と流血を重ねた結果、その代償として中国共産党政権を成立させ、権力の座に就いた人々でした。毛沢東は文化大革命を發動させ、絶対的な権力維持に努

めます。また、鄧小平は、一九七六（昭和五二）年四月五日に生じた「第一次天安門事件」で、反革命の汚名を着せられて失脚した恐怖感から、一九八九（平成元）年六月四日に起きた「第二次天安門事件」では、人民解放軍を動員して、徹底的な弾圧を人民に加え、権力を維持しました。つまり革命第一世代の指導者たちは、自らの生命を賭して、流血の中で革命を指導した結果、権力の座を掴んだ人々ですから、その権力維持も死にもの狂いになります。何人たりとも自らの権力の座を譲ることはありません。それは毛沢東しかり、鄧小平しかりでした。

た現実主義者でした。胡錦濤や習近平になると、文化大革命を経験し、中国共産党の政治闘争に巻き込まれた世代です。特に習近平は、中国共産党の政治闘争によって、辛酸を嘗め続けた人です。

こうした世代の人は、政治闘争によって、反革命とされて失脚する恐怖心を、身をもって知っています。従って心の底では、民主的な改革について理解がある半面、民主的な改革によって自らが失脚する恐怖心も強くあることから、集中的な権力維持に務める傾向にあります。従って中国の民主化は、習近平自身が自ら構想し、陣頭指揮を執って行うことが必須条件となりますが、彼には常に大勢の政敵があり、数度の暗殺未遂事件が起きています。なかなか思い切った民主化は難しいと思われるのですが、「民主」、「自由」、「法治」を中国の夢だとする習近平政権が、民主化勢力が求めている政治の一部を実現しようとする姿勢も窺うことができます。

―海外で始まった『中国の春』運動―

中国の民主化運動を海外で最初に開始したのは、カナ

ダに国費留学していた王炳章という医学生でした。彼は『中国の春』という反体制派の月刊誌を刊行し、その雑誌を母体として、一九八三（昭和五八）年十二月、アメリカ・ニューヨークにて、中国民主団結聯盟を結成しました。本部はアメリカのニューヨーク市クイーンズ区フラッシングに置かれ、分部（支部）が、日本をはじめ、タイ、オーストラリア、ドイツ、フランス、イギリス、イタリア、カナダなどに開かれました。

『中国の春』誌は、中国共産党内部の情報や派閥抗争、社会問題、機密の暴露、民主化のための理論などの内容が満載されていました。インターネットがない当時として、『中国の春』誌は画期的な中国情報誌でした。

中華人民共和国は、竹のカーテンによって閉ざされた国で、その実態は今日以上に謎に包まれていました。中国人民自身も、また中国共産党員自身でさえ、自国で何が起きているのかわかっていません。『中国の春』誌は、秘密で中国国内に持ち込まれて、それは燎原の火の如く地下で拡散しました。『中国の春』誌を読んだ中国人民は、同誌によって、中国共産党の内部実態と矛盾を知り、また、中国の民主化について啓蒙されたものです。

かつて孫文を盟主に戴いた中華革命組織、「中国同盟

会」は、機関誌として『民報』誌を発行、それが大陸に持ち込まれて、中華革命のための啓蒙と理論構築、それに革命の機運を高揚しました。『中国の春』誌の発行は、その故事に倣ったものであり、『中国の春』という題字は、孫文の筆跡を使用していました。

一九八三(昭和五八)年十二月、中国民主団結聯盟(中国民聯)の結成によって、『中国の春』誌は、正式に中国民聯の機関誌となりました。

中国民聯は綱領において、中国共産党が堅持する、「社会主義の道」「プロレタリア独裁」「共産党による指導」「マルクス・レーニン主義と毛沢東思想」という、四つの原則の取り消しを明言し、中国における中国共産党の統治を否定しました。その代わりに、「民主」、「人権」、「自由」、「法治」の四つを中国共産党に要求したのです。

ちなみに私は、当時知り合って友人となった、東京大学に国費留学していた中国人の縁によって、この中国民聯の結成大会に日本人として唯一の来賓として参加しました。そして中国民聯の創立委員の一人になって活動をするようになりました。

私は、『中国の春』誌の香港からの輸入元となって、同誌の日本国内での普及を行いました。その他、中国民聯「反革命」とされた同事件の名誉回復を、中共政府に訴えていました。

第一次天安門事件を契機に中国では、一九七八(昭和五三)年秋から翌年三月二九日まで民主化運動が高まりました。当時、北京市西単では、塀に中国の民主化を訴える大字報(壁新聞)が貼り出され、その塀は「民主の壁」と言われていました。民主の壁の前では、『四五論壇』、『民主の壁』、『群衆参考消息』、『探索』、『今天』といった民主化を主張した雑誌が売られていました。これらの雑誌は、民主の壁運動に参加した人民自身が、ガリ版印刷で、地下出版したものでした。こうした運動を「北京の春」運動と言います。

中国の民主化運動を盛り上げたのは、一九七九(昭和五四)年一月十八日から同年四月三日まで開かれた「理論工作務虚会(理論会議)」において、中央政治局委員の胡耀邦が、それまでタブーとされてきた人々や文芸作品の名誉回復を図ったことでした。

一方、中国共産党は、一九七八(昭和五三)年十二月十八日から同月二二日まで開催された、「中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議」において、毛沢東死後、最高指導者の席に就いた華国鋒党主席兼首相が、中華人

の活動を中国人に扮して行いました。

当時の中国民聯は完全な秘密結社でした。何故ならば、中国からの国費留学生中心だった同組織は、中国共産党政府からは、中国国民党の特務機関が後ろ盾となり、中国共産党政府の転覆を謀る危険な組織だと認定されたため、中国民聯に関係した本人やその家族が、中国共産党の特務機関に生命を狙われたり、中国の公安当局に逮捕されたりする可能性があったからです。

また中国共産党の情報機関員の潜入を防ぎ、組織防衛を計るために、中国民聯のメンバーは、一同に会することなく、それぞれ責任者と個別で会っていました。

このような背景から、当時、中国民聯に参加した中国人に代わって、私が中国人に身分を偽装した上、日本人の友人を募って、中国大使館前で抗議活動などを繰り返し行いました。

——『中国の春』誌の主張と中国民聯の影響——

『中国の春』誌の主張と中国民聯の当時の活動は、一九七六(昭和五一)年四月五日に北京で生じた、第一次天安門事件を「平反四・五運動」というスローガンの下、

民共和国建国以来の中国共産党指導者たちの重要な目標であった「工業、農業、国防、科学技術」という四つの近代化の実現を目標とすることを唱えました。

『探索』誌を編集、発行していた、北京動物園の電気技術者だった魏京生は、これを握って、同誌の中で、「四つの近代化に加えて、政治の近代化が必要だ」という論陣を張り、五つの近代化が中国には必要だと言っていました。この中で魏京生は、「労働大衆が権力を握ることは、近代化には欠かせず、中国共産党は保守派に支配され、人民は長く血を流す戦いを通じて、保守派を倒す戦いをするければならない」と訴えました。

彼は金生という筆名で、「中国共産党による三〇年間の独裁と、自由も民主的でもない現状を見つめるよう」に訴えました。彼はまた、復権した鄧小平を、「思想解放、実事求是」を唱える改革者の一面と、従来の中国の支配者に共通する権力的な一面があると鋭く分析し、「民主か、それとも新たな独裁か」という壁新聞を貼り出して、「鄧小平が新たな独裁者になろうとしている」として、人民に対して警戒を呼びかけました。

これに激怒した鄧小平は、直ちに、単なる「巷の噂」として、外国人記者に対し、ベトナム戦の司令官の名

前や中国軍の損害について魏京生が話したことを捉えて、彼を「軍事情報漏洩罪」および「反革命煽動罪」で逮捕し、十五年の判決を下して、獄中に放り込みました。一九七九(昭和五四)年三月二十九日のことです。

同日、北京市党委員会は、集会、デモ、壁新聞の掲示などを規制する通告を發布するとともに、「プロレタリア独裁」、「社会主義」、「中国共産党による指導」、「マルクス・レーニン主義と毛沢東思想」に反対する壁新聞の貼り出しや出版物の出版を禁止しました。

それは丁度、前述した「理論工作務虚会」が開かれていた最中で、胡耀邦による反革命とされた人々や文芸作品の名誉回復によって、民主化運動が盛り上がりを見せていた時期でした。

こうした民主化の動きに対して鄧小平は、魏京生を逮捕し、北京市党委員会の通告を出した翌日の三月三日、「理論工作務虚会」の席上で、中華人民共和国において、中国共産党が守らなければならない最重要の政治路線である「四つの原則」、すなわち、「社会主義の道」、「プロレタリア独裁」、「共産党による指導」、「マルクス・レーニン主義と毛沢東思想」を堅持するとした演説を行いました。魏京生の逮捕と鄧小平による「四つの原則」堅持の宣言

求運動を行っていました。また、魏京生が入獄していたのと同じ時期に、徐文立と王希哲が政治犯として獄中に在りました。

北京の春では『四五論壇』を発行していた彼らは、一九八〇(昭和五五)年、中国共産党に反対する党の建党を準備していたことから、「組織反革命集団罪」に問われたのです。徐文立が十五年、王希哲が十四年という長期刑でした。

『中国の春』誌と中国民聯は、魏京生の釈放運動に併せて、徐文立と王希哲の釈放運動を展開しました。

私たちは顔がわからないように、眼の部分だけ穴を開けたスーパールの紙袋を被り、中国共産党政府を批判するビラを撒き、中国大使館の前に魏京生、徐文立、王希哲の即時釈放を求める横断幕を掲げました。そして、『中国の春』誌を大使館員に配って、中国共産党の脱党と亡命を呼びかけました。中国大使館の中からは、教育部担当で留学生を監視する二等書記官の王行虎という人物が出て来て、盛んに私たちの写真を撮っていました。

その他、警視庁公安部外事二課の私服警官、法務省公安調査庁や内閣調査室、陸上自衛隊調査隊、外務省の職員も現場に姿を現しました。台湾やアメリカの情報機関員らしい怪しい人影もありました。彼らは一同に私たち

によって「民主の壁」は崩壊、「北京の春」運動は終息しました。

その後、中共政府は北京オリンピックの誘致を期すために一九九三(平成五)年秋、獄中十四年半で魏京生を「繰り上げ釈放」しましたが、彼は積極的に一九八九(平成元)年六月四日に生じた第二次天安門事件や人権問題などで、外国要人との会見やメディアのインタビューで中共政府を批判したため、再度、魏京生は中国共産党から睨まれます。一九九四(平成六)年四月に彼は逮捕され、翌年十二月に、「政府転覆陰謀罪」によって、懲役十四年の判決を受けて、魏京生は下獄しました。

その後、アメリカをはじめとする欧米諸国の人権団体や政治家から、国際的に魏京生の釈放要求の運動が高まったため、中共政府は、一九九七(平成九)年十一月十六日に病氣療養を名目に魏京生を仮釈放し、病氣治療のためにアメリカ入りしました。これは中共政府による魏京生に対する事実上の国外追放処分でした。

通算、十八年間も獄中で過ごした魏京生は、「良心の囚人」と称され、「民主闘士」として、中国民主化運動のシンボリック的存在となっています。

『中国の春』誌と中国民聯は、当初から魏京生の釈放要求の写真を撮影したかと思うと、今度はお互いの写真を撮り合っていました。まさに中国大使館前はスパイ合戦のような雰囲気だったことが印象的でした。

活動が終了して、私たちは現場を離脱するにあたり、中国大使館による尾行や拉致、監禁を恐れ、また日本の治安機関をはじめ、各国の情報機関員による行動確認から逃れるために、電車で飛び乗り、飛び降り、そして乗り換えを繰り返して帰途に着きました。当時はいっせいで暗殺されてもおかしくない緊張感がありました。

ところで、一九八六(昭和六一)年十二月、八六学潮と言われる民主化を求める学生運動が始まりました。『中国の春』誌と中国民聯は、この八六学潮に大きな影響を与えました。

同年五月、当時、総書記であった胡耀邦は、政治改革を推進し、「百花斉放・百家争鳴(双百)」を提唱して、言論の自由化を図ろうとしました。六月には、「共産党と政府の分離」、「行政効率の向上」、「官僚主義の弊害排除」、「経済制度のさらなる改革」を目指した政治体制改革を鄧小平が提唱しました。中国共産党の「四つの基本原則」を堅持する鄧小平が言う政治改革とは、あくまでも行政の効率化を狙ったものであり、民主化を推進することでは

ありませんでした。

しかし、学生や知識人たちは、政治改革に伴う民主化の推進を求めたのです。こうした政治的な動向を受けて、同年十一月頃から中国科学技術大学では、地元の安徽省合肥市で近く開かれる西市区の人民代表選挙を批判する壁新聞やビラが張られるようになりました。そこには、「自薦の候補者を選挙に送り込もう」と呼びかけるメッセージが書かれてありました。

同大学は、中国のサハロフと呼ばれた、中国の反体制派の天文学者の方励之が、第一副校長を務めていました。同年十一月に方励之は、上海市の同済大学の大学院生だった陳破空の招きに応じて、同大学で講演をし、一万人以上の聴衆を前に、共産党による中国統治を徹底的に批判し、社会主義は失敗だったと、訴えました。同年十二月四日、中国科学技術大学で講演した方励之は、「民主主義は上から下に与えられるものではない。自ら掴み取るものだ」と、学生を激励しました。

中国科学技術大学の学生は、すぐに反応。翌日に四千人余りによる街頭デモを実行し、候補者を選ぶ権利や政治的発言権を求め、シユプレヒコールをあげました。デモはたちまち北京、上海など全国に波及しました。

しかしアメリカは、六・四事件の後に中国における独占的な市場と利権を得るために、中国民主化運動を支援という形で介入し、中国に人権問題を理由に揺さぶりと圧力をかけはじめ、今日に到っています。それに伴い、中国民主化運動も初期の『中国の春』誌と中国民聯の活動とは大きく変わりました。

『中国の春』誌と中国民聯、そして中国の民主化運動自身がアメリカの介入によって、六・四事件を境に組織の分裂を繰り返すようになってしまいました。

中国の民主化の実現は、アメリカの介入などによる外部からではなく、中国共産党内部からの改革によって、初めて実現するものなのです。

孫文時代の中華革命運動は、清朝、すなわち満洲族に対する漢民族の民族革命、「滅満興漢」でしたが、中国民主化運動は民族革命ではなく、あくまでも中国国内の政治的変革です。そこが孫文の中華革命と今日の民主化革命が大きく異なる点です。

一九九一(平成三年)十二月にソ連が崩壊しましたが、それもソ連共産党内部の改革によってもたらされた革命でした。従って、今日のロシアの権力中枢は、かつてソ連共産党員として政治的に活動した人々によって占めら

方励之をはじめ、『人民日報』の記者で、『第二の忠誠』の著者劉賓雁、作家の王若望らの中共黨員知識人が、学生デモを積極的に支持しました。彼らは、いずれも『中国の春』誌に執筆し、中国民聯と何かしらの関係がありました。十二月三〇日、こうした事態に対して鄧小平は、胡耀邦をはじめ、趙紫陽、万里、李鵬らを集めて学生デモに対する怒りを爆発させました。

一九八七(昭和六十二年)一月十六日、『八六学潮』の煽りを受けて、政治局拡大会議において、学生に同情的であった胡耀邦は、総書記を解任されました。まさに『八六学潮』は、一九八九(平成元)年六月四日に生じた、『六・四事件』すなわち第二次天安門事件(六・四事件)の前哨戦となったのです。

『八六学潮』で中国民主化運動に火を着けた『中国の春』誌と中国民聯は、胡耀邦の死去に至るまでの三年間、その炎を煽り続けたのです。その結果、中国は、『六・四事件』という形によって、民主化運動が大爆発をしたのです。第二次天安門事件は、中国共産党内部から生じた、中国人自身による自主的な革命運動であって、アメリカの直訳式の民主主義の押し付けによる民主化運動ではありませんでした。

れています。その点、ロシア革命とソ連崩壊による革命とは大きな違いです。中国の民主化はまさに、ソ連崩壊と同じような軌跡でなければ、実現できるものではありません。

アメリカの介入によって中国共産党政権が倒れ、アメリカ式の民主主義を中国に押し付けた場合には、中国は大混乱となり、結果として人民に不幸をもたらすことになるのは、アフガニスタンをはじめイラクやリビアなどの例を見ても一目瞭然です。アメリカ主導による中国民主化とチベット、ウイグル、南モンゴルの独立運動は、大変に危険なものであり、大いにアメリカの動向を警戒すべきです。

中国の民主化や民族独立問題は、断じて、それぞれが中国人民と各民族の自主的なものでなくてはならないのです。



田中健之(たなか たけゆき)

歴史作家・維新運動家。昭和38年11月5日生まれ、福岡市出身。玄洋社初代社長平岡浩太郎の直系の曾孫で、黒龍會を創立した内田良平の血脈を継承する一族。拓殖大学日本文化研究所現現代研究センター委員研究員を経て、現在、ロシア科学アカデミー東洋学研究所及びモスクワ国立教育大学外国語学部委員研究員、日露善隣協会会長、2008年に黒龍會を再興し、会長に就任。主な著書に『満洲に祀られる人々』、『昭和維新』、『北朝鮮の終焉』、『実は日本人が大好きなロシア人』、『横浜中華街を歩く』。中央公論「正論」『歴史探偵』などの雑誌に多数執筆。